

塩尻志学館高等学校創立 110 周年事業に関わる記念品贈呈式（2021. 11. 30）

校歌の冒頭に「朝目よし 桔梗ヶ原」朝眺めが素晴らしい桔梗ヶ原と唱されるこの地より、遠く西方を眺めますと北アルプスの峰々は銀嶺と化し、美しくそして厳しい冬の到来を告げております。

本日、この佳き日に長野県塩尻志学館高等学校創立 110 周年事業に関わる記念品贈呈式が開催されますはことを心から感謝申し上げます。

この度、同窓会長中野重則様及び PTA 会長山口俊也をはじめとする創立 110 周年記念事業実行委員の皆様には、ご多用の中記念品贈呈式にご臨席いただきまして誠にありがとうございます。本来ならば盛大に記念式典を開催するところを、新型コロナウイルス感染症拡大防止を最優先に賢明なご判断の元、ささやかながらも本校生徒・教職員にその歴史を心に刻むセレモニーに変更していただきましたことを衷心より感謝申し上げます。

後程、贈呈いただきます記念品につきましては、どの品も本校の教育活動のために厳選していただくとともに、多額の資金を投入していただきました大変ありがたい品々でございます。末永く大切に使用させていただきますこと、全生徒教職員を代表してお誓い申し上げます。

さて、生徒の皆さん、このセレモニーを機に考えてもらいたいことがあります。

それは、日本人が大切にしている「お陰様の文化」であります。日本人は、古来より思いやりと感謝の心をもった民族でした。弥生時代より国を支えていた農業は共同作業が基本で、田畑の水も力を合わせて整備して引き込み、手が足りなければ隣近所が手を貸す、といったことが自然に行われてきたのです。その底流をなすものは「ありがとう」「お陰様」という感謝の思いでした。しかし、時代が移り変わる中で、しだいにそうした思いは失われていき、いまは、「自分が、自分が・・・」という我欲が広くはびこる社会となってしまうのではないのでしょうか。社会全体の風潮が、成果第一主義「自分の成績を上げることが最優先」「自分の成績さえ上がればいい」という個人主義が我欲を加速させているかのように感じます。

しかし、この風潮を覆す出来事がありました。今から 10 年前、本校創立 100 周年の年、3 月 11 日に発生した未曾有の災害東日本大震災での出来事です。被災地では、住む家や大切な身内を何人も失い生活の糧を無くした方々で溢れかえっていました。そんな人生最大の逆境にあっても、救援にあたる人たちに対して涙ながら「感謝」を口にする大勢の人たちの姿がありました。この様子を目の当たりにした海外のマスコミはこぞって日本人に受け継がれるこの「お陰様

の文化」を称賛しました。自国ならば略奪・暴動がおこる中、日本人は整然と皆で手を取り合って災害復旧に向かっていると。

ところで、「お陰様」のもともとの意味を皆さんは知っていますか？その語源は「ご先祖様」なのです。この世にはいませんが、陰に隠れている方々がいてこそ、今の私たちが生かされているという意味なのです。私たちは、一人で自立して生きていると感じているかもしれませんが、私たちには両親がいます。その両親にはそれぞれに二人ずつの4人の親が居ります。そうやって10代遡ると何と1024人を超えるご先祖様が居るのです。その1024人の内、一人でも欠けていたら今の私たちは現在ここにはいないこととなります。

高校の歴史も同じです。塩尻志学館高校の歩みは110年となります。この歩みの中には、どれほどの「お陰様」が集積しているか、それは天文学的な数字と偶然で成り立っているに違いありません。このことを噛み締めて、10年後20年後少子化の中逆境の中で、本校がこの桔梗ヶ原の学び舎を存続させるために、今、私たちにできることを考えようではありませんか。時代の変化に合わせて「総合学科のパイオニア校」としての輝きを保ち続けるには、何ができるかを考えようではありませんか。そのことを先生たち同窓生の皆さんたち地域の人たちと真剣に考える時期が来ていると思います。10年20年後、皆さんが大人となり、親となり、胸を張って「お陰様で塩尻志学館高校を卒業しました。」と語れる日が未来永劫続くことを心より祈っております。

ご臨席の皆様、本日は110周年記念事業に関わる記念品贈呈式を開催していただきましてありがとうございました。いただいた記念品は有効に活用させていただくとともに同窓会・PTAの皆様が、誇りに思える塩尻志学館高校で有り続けるよう生徒・教職員ともども一層精励致します。今後とも変わらぬご支援を賜りますようよろしく申し上げます。結びに、本日、ご臨席の皆様並びに塩尻志学館高校に関わる全ての皆様の今後の御多幸と御健勝をお祈りして、校長からの式辞とします。本日は誠にありがとうございました。